

燕石雜志

百卷

- 一 鬼神餘論
- 二 蟬丸
- 三 惡禪師
- 四 正儀義隆
- 附 一 休詠評
- 五 八幡太郎
- 六 浅草事實
- 七 地名の訛謬
- 八 四時代謝
- 九 三かき所
- 十 心木
- 附 長篠
- 附 土字體
- 附 俗字考

卷之止

15
1599
3



養石雜誌卷之三

江戸

養菱軒

隴澤

解

瑣

吉

述



鬼神餘論

鬼神の論ウツク盡ツクく火物ウツクとびとよれを述ノりて童蒙ウツクのたをせり
疫鬼エキキ瘧鬼トウキとのありのあり疫鬼エキキハ俗ウツクより瘧病ウツク神疫鬼エキキハ俗ウツクより瘧瘡ウツク神
あり和名ウツク鈔ウツクの瘧鬼ウツク邪鬼ウツク窮鬼ウツクホをいり窮鬼ウツクの人の家ウツクよりあるを和名ウツク
の世ウツク俗ウツク貧乏ウツク神ウツクといふ是ウツクあり和名ウツク鈔ウツクハ瘧鬼ウツク茶ウツク鬘ウツク獨ウツク断ウツク云ウツク昔ウツク顛ウツク
顛ウツク有ウツク二ウツク子ウツク亡ウツク去ウツク而ウツク為ウツク瘧鬼ウツク其ウツク一ウツク者ウツク居ウツク江ウツク水ウツク是ウツク為ウツク瘧鬼ウツク
和名ウツク衣ウツク也ウツク或ウツク余ウツク邪鬼ウツク日ウツク本ウツク紀ウツク云ウツク邪鬼ウツク和名ウツク女ウツク之ウツク窮鬼ウツク遊ウツク他ウツク土ウツク室ウツク
美ウツク乃ウツク加ウツク美ウツク或ウツク余ウツク邪鬼ウツク日ウツク本ウツク紀ウツク云ウツク邪鬼ウツク和名ウツク女ウツク之ウツク窮鬼ウツク遊ウツク他ウツク土ウツク室ウツク
窮鬼ウツク師ウツク説ウツクを萬ウツクとらりるるれ大陽ウツクの毒ウツクあり一時ウツクの氣ウツク運ウツク棄ウツク
流行ウツクと顛顛ウツクの子ウツク亡ウツク去ウツク疫鬼ウツクとありといかりのハ疫ウツク女ウツクの疫ウツク痛ウツクハ冬ウツク
癸ウツクとして春夏ウツクの間ウツク最ウツク盛ウツクありその寒ウツクと傷ウツクらるるの春夏ウツク大陽ウツクの毒ウツク小ウツク觸ウツク



誘引の故に私漢除夜の儺一りり疫鬼を驅とり我俗を疫
よりとの後遂に災厄の厄とするりのの候より唐山より立春の月土牛を造
るる農変を造る 天朝亦これに倣ふて大寒の日夜并に陰陽寮
土牛童子の像を造る門には立延喜式に土偶八十二枚 土牛十二匹
と云えりその数一十箇月を表する故土牛の青黄赤白黒を春夏秋
冬東西南北の色に随いてこれを交ると亦水鏡文氏紀に慶雲二年とす
るに世の中らちちとてつらふ人少くはつらふ追儺といふはつらふ
と云え亦慶雲一年天下疫癘盡うる人民多し失くは土牛をばくま
追儺といふは始つらと云え根えりも記されたり吉田の疫塚これの餘
は秋毎歳節分の夜吉田神祇官より庭上の塚を築くこれを疫塚
といふその塚正月十九日に至りて鮮まるを清祓といふ亦その日山城國八幡
の社頭は疫神を祭る亦その月十六日は伊勢國度會郡山田の御小獅子改

の神事あり亦二月十日高尾の法華會これを女良比花といふ中とらひ花と
鼓らつと寂蓮の語らふはちの法華經所今
穢に至る止るつら夏越て七月に至る陽氣衰ふ故に秋はこれを穢と
王氣が鬼ハ太陽の毒なりといつらひの毒なりんわは疫鬼も又形は但
丁時の氣運は随て流行するたれその形在がたれも陽衰るに至る消
然とつら迹なり辟る酒食の腐爛するたれ忽然とつら蠅の聚る小似り
人との酒飯を撤去するハ蠅も又随て迹るたれがたれつら小蠅鳴悪神とい
るるる病劇しれ時人往く疫鬼をるるありつらその後とつら形
状一定でとつられ陽毒のまはつらなつらとつらこれを山気の蒸る
雲霧を起るとつら壁を山の中の人その雲の起るをえとつら勝騰たり山下の人
これをえんハ別は奇峯を添るが如く瘟疫の人と通る熱邪内は蒸してその
毒外は發せるとつら患者との疫鬼をるるこれ山下とつら雲氣を騰望し

是は奇峯と云ふが如く一人の毒に觸ると亦隨て患む故に聖王皇天
郡土を祀りて陰陽その時は乃ち乃ちんを禱して世俗春夏は稔穰し
りて疫鬼を驅る驅る驅る凡天の疫癘の流行して漢より
至るやんく蓋有りてをりて天仲景氏を生じて永く疫鬼を驅る
天朝 欽明天皇御宇に疫鬼大に起る弓削守屋大連その天災を禱して
疫鬼を追うて又食茶に又ササと云ふれりてその身終に戮りて夫張
楨の長女一を守乃り方術を同郡の張伯祖に受傷寒論十卷を著して
天の疫邪を退治して守屋ハ 天朝の大匠乃り權を稱目馬子ホと争て
遂に疫鬼を驅る攘りて亦是一時の氣運に係る歟その成敗は至る予が志
るところよりと疫鬼も又疫鬼も同ト云ふる人それを懼る疫鬼より甚
し世俗より小痘の小児の疫より直にこれを呼ぶ疫人といはれが如く棚を
架一切の供物そのまは拜具しそれを祀る最つじり凡序熱よりそれを祭る

素三考二

至エフケカカ、オヨビ、ヨウグワイ、オク、トホサク、イハコト、
枚厭齋結痂及及郊外に送るこれ敬して遠るの意歟わく毎戸にすめる隨に
痘鬼のぼくくその處を治るが如く往古の痘瘡を患るの十は八九に死
りり前後少づらの餘の貴人痘瘡よりを免ひし大境はえたり接をふ
続 日本紀天平七年閏十一月壬寅云是歲不稔自
夏至天下患痘豆瘡一染瘡夫死者多り痘瘡の事史にえん
るはこれぞ歟の後 醍醐 村上 山融の御宇痘瘡より人多く死せ
るや一條帝の長徳四年よりこれに患るの亦多く死るはなり王も
りり庶民に至るやういふごとくして疫の事なり 後一條の皇方より痘瘡患に
ちひそのち御面は痲びりやうとまじし修め此らるる痘の痲あるの事
るらるるや一展患なるのゆゑにびびるもの怪し實に一種の奇病なり天
の人民もあはれを患るはれを怪し人も懼る者病あり天の
とらん何事も痘とありては痘は怪し酒とありては世よりてこれを

兼久元年正月廿七日將軍實朝公右大臣拜賀とて鶴岡八幡宮祈願之

る夜別當阿闍梨公曉頼家の子石階のほらり又規ひふたりとて劍を抜

公を犯しつらうと世の人公曉を悪禪師とてなせり蟠龍の俗説辨

これを辨しつらうと君又讐不可與共載天公曉ハ出家人たり

久由實朝ハ父の讐なりとれを宗よとべれよとせ人悟らとて

増と悪禪師をりつらうと名よ負り凡智の決断浮薄の至とて

論理のよ似られどもいふとての理を極とていへばとて東鑑云

久元年七月十八日頼家於伊豆彼善寺被害于

時年二十三亦愚管抄よりその喉を絞る陰囊を抜られを殺とて

を刺するよふふとてよりその喉を絞る陰囊を抜られを殺とて

これハ頼家卿を殺するのハ時なり且その死實朝ハ十二歳

ともヤ奸智の人なりとも兄を殺すの毒計をめぐらしめよとて

公曉も亦父の讐をいひしる禪祿の中よりその縁の極をよくとる

るる一加稱建保元年夏九月實朝みそりよ和田義盛一北條を討

よ義時ゆらゆら實朝をとりとめりゆらゆら和田の軍界合期で

義盛一家滅亡よ及べりゆらゆら實朝も又ゆらゆら北條を討

頼家も異るゆらゆらをゆらゆらゆらゆら實朝決一そんを害一ゆらゆら且鶴

出拜賀の自身後の紀念とて髪を抜近臣湯ア一ゆらゆら

ゆらゆら小條が奸計を腹をゆらゆらゆらゆらその死期をゆらゆら

ゆらゆら白石先生の読史餘論を觀てもゆらゆら公曉ハ才浅く慮

ゆらゆら時よゆらゆら實朝公を父の仇ありと思ひあやゆらゆら

遷俗一そ父祖の箕裘を嗣んとありゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆら怒あり時政義時とて謀とて頼朝の統を倒とてゆらゆら

朝の統をゆらゆらゆら公曉とてゆらゆら公曉由又罪あり天の

楠正俊が赤坂ノ城ヲ守テ攻ル同下旬和
等が武威以ノ外楠ステニ敗北殆危シ
以上柳

正平廿四年 北京應安 正月楠正俊武家へ下降系と告

同四月正俊入洛多満と獨と

建徳元年十一月南朝の猛士和田某 以下初應ト

軍兵を引率し楠が要害を攻正俊武家へ降る故あり

南朝を皆死す武家へ降系とて一族の正成正行の送別を

聊もとむりぐり守り南帝へ忠を勵んと欲するのミ 此未畧

文安四年十二月云云南朝官自殺楠二弟ホの勇士既ニ敵を若干討

捕遂に戦死と 以上櫻雲記

と云ふより細く要記と云ふとありとの楠二弟とありの正俊が子致給

正俊が子致給ぬべし亦是利治乱記より

應安元年云云同二年正月二ハ將軍茂満幼女

ナリトイヘビ 仁徳内ニ深キ故ニ南方ノ大敵楠

正儀等降参スベキ 旨血書ヲ以テ依申細川右

馬頭頼之赤松判官等ヲ南方へ遣ス四月ノ

二ハ楠正儀入洛シテ先細川頼之ノ宅へ向テ

一禮シ則ニ献有テ其後頼之同道シテ將軍茂

満公ノ御館ニ参礼等アリ 龍尾ト云太刀ヲ正

儀獻ス將軍甚秘藏セリ 以上足利治乱記

ゆのぶらうんえたりあつるは蟠龍子といふは戯曲を引く正儀が足利家

へ降と云ひて終るなれうを論でらまはつていふはゆかゝとの書どもせえざ

里々るふや千慮の一失あるべし正儀が足利家へ降りしと大塔宮の若宮陸

良親王の賀名生の奥銀嵩の親王と南帝を攻めりんとせしむる正

十五年四月十八日の千載のゆふ人をしる書を切し明の潮聲湖が人の秋

貌ハ天ユうれと申す子と肖なるりのありは樹ハ入能なれども又子りあふん

しも相似と申されハ人作ハ天ユはまされそといひての理をわが世俗の常

言ハ親ハ似とてを鬼といふ人と鬼といふ相類ハ父殺父子の氣相似と

が如くは及鬼神論とあり考ふる

○賜武部大補義治の嫡男相摸守義隆 或ハ義隆は作ルオウニヤウキヤウタオウモ

年四月廿五日相摸御底倉より討死しぬり鎌倉大草紙より息刑部

少補ハ一所ノ居あり也より故相摸守を討死すと記せりは刑部

少補と稱するものハ少補義宗の嫡男貞方朝臣のつとをせうんやあつる

義隆といふ再後才の子息といふと同書ハ應永三年の書のつと小山若犬丸

一本大若丸子傳り 奥列の住人庄司清包を殺して右新田義宗義隆の子息

新田相摸守その後才刑部女補をうらむ大若と云ふ白河邊に打とせり

間上列武列より進居る宮方の末葉悉く馳あつるとありこの刑部少補

といふ何人ぞや稱する後才と記し後子息といふ貞方朝臣のつと

みりぬりと号する貞方の刑部少補又補せられぬいしつと人義宗朝臣の

御方より建徳二年正五位下越後守天授二年後四位下の左少将

ありあひし亦義隆に建徳二年正五位下相摸守天授二年後四位下陸

奥守右女将奥列國司に拜任せられぬり彼義隆朝臣を鎌倉大草紙

櫻雲記亦義隆は作る又後合記は義則といふ陸の字の刻み子ありとあひし

二郎の賀茂の神社三郎の新羅の神社さくえ服口さくえひくかて八幡
右郎賀茂二郎新羅三郎とせうせうとせよひひりて侍たりあるよ十訓
抄云後冷泉院の御時陸奥守源頼義茂守府の軍以兼る貞任宗任
を責るるよ永義の末より度々合戦はつれたりける天喜五年十二月二十
二而餘騎の兵をあらうとせひるるよ貞任等四子餘騎の執を集めり
あらと金為行が河堰柵よらもまらるる是をあらたけり時雪ゆり風ふり
と味方の兵凍けつれたりるる勢もあらうとせりたる間軍のつと大よ
破るる者数をあらうとせり兵四子散れり残とらるるよ六騎長男
義家後理少進藤原景清清原貞廉藤原季範大宅光任藤原則明水
也貞任が軍をあらうとせり責るるをあらうとせり雨の如くあらうとせり義家
防に戦ふとせり神のよと若少の齡よと大なる笑を射るるの器よあらう
つるものあらうとせりつるものあらうとせり四重よあらうとせり軍をあらうとせり

中ぬと内へ入ると度とつる編光のよと一月を合るるのよ貞任
をあらうとせり八幡右郎と名づく云云とつるを陸奥誌記よ参考とせり
そのつるり第六張云同身乃天喜五年十一月將軍率兵十八
百餘人欲討貞任等貞任等率精兵四千餘人以金
為行之河崎柵為營拒戰鳥海干時風雪甚勵道路
艱難官軍無食人馬共疲賊類馳新羅之馬敵疲足
之軍非唯容主之勢異又有寡衆之力別官軍大敗
死し者數百人の軍長男義家驍勇絶倫騎射如神
白突重圍中必斃雷奔風吼神武命世夷人
走敵無當者夷人立号曰八幡右郎云云今按
朝臣の武勇絶倫とて東夷を威伏しあひる疑ふべからず貞任亦その武
勇を賞嘆し八幡右郎と唱へたりとつるの稱ありとつる後記の語文

あるべしなり 果して此の如く賀茂二郎新羅二郎と稱する由亦列
縁故ありしなりを鎌倉管領九代記巻之四賢王丸之服の辰云持氏
の嫡子賢王丸殿之後の少はあり今の京都鎌倉確執と於軍家にて
頼むべしなり由ありとされしが八幡を奉義家の佳例に任せんとして鶴が
岡の八幡宮とむれ賢王丸を實前とあり加冠とあり義久と名付ありけり
云云とあれは家當初八幡宮の神殿よりえ服たのふよりして世人八幡を
郎と稱する疑ふなり人の稱号などよけれり牽強附會の疑をあらは
せる事と疑ふの不安は田原の辺にの地名と書い假字ありしを據る
秀郷龍宮へ越すとれども米の場とありを據るにしりし世人依據る
と稱するより平記よりえたり又記賢王丸の論語より一以賢王とす
聖語をあらはるるなりたるは賢王丸の名の實定とあり過る冠をかり
のしりし此の如く教とあり賢王と更たありし物より定むるなり

從之よふふありとありしなりとせられしありしは抑々傳はるる
らと史傳は謗文あり記録は龍鑿あり況小説野乘に至ると事
言は係らざるものなり今も古實の據りありける故あり

⑥ 浅草の事實

浅草の駒形堂むれ河のくまを正面よりその圖説江戸名所記大和名所
濫ホよるえたり 國のトモ 兼出と 較よりあるよ使くせしとあり名不濫る駒形
堂と題してあり此の如く河のくまの守追子の風は帆をくくする
秋中より此堂をあらは堂のうりるやうなりとありとありとありとあり
この説よりゆくと按ざるは當初の堂は浅草の親世音へおらると繪馬
をくくせんりよ建てる馬頭親音を安置したれば駒形堂と名づけたるは俚俗
の訛とす駒形堂と唱へたる致するれは名所記は駒形堂と記したれば
留るものなりと物したるは再按ざるは竹所の渡を昔の花方の渡とありとあり



江戸名所記駒形堂圖
卷之三第廿張

並樹の樓のりくは渡りたるゆゑをとりて花方の渡と唱へて、駒貫堂の方
へ渡りたるゆゑをとりて花方の渡と唱へて、その堂を駒貫堂と唱へ
たり。近曾ららの穿鑿よりいと精細なる人ありたり。いかに身ぬら
りて江戸名所記の寛文二年は京都の書肆河野道清が刊行せりとの
編者も画工も亦の一人ありたり。伝寫の誤も亦らん。致大和名不世
の養川師宣が画くあり。書肆萬屋清に刊行せり。後、
剛去りしや正月吉日との記し。詳するべし。いかに名不記と同
よ出りたるべし。竹をとりてこれをあつとすと。同書龜戸天神の圖は、葛西
の郡龜井戸といふ所あり。比もさるべし。原よりをとりて龍紫
樂寺の天神を勧請し、とあり。龜戸天神宮の寛永三年は菅原信祐建立
とあり。の鏡より考ると、その書の刊行寛永を去ると遠くは、
駒貫堂と記し、その實をいへりといふ。

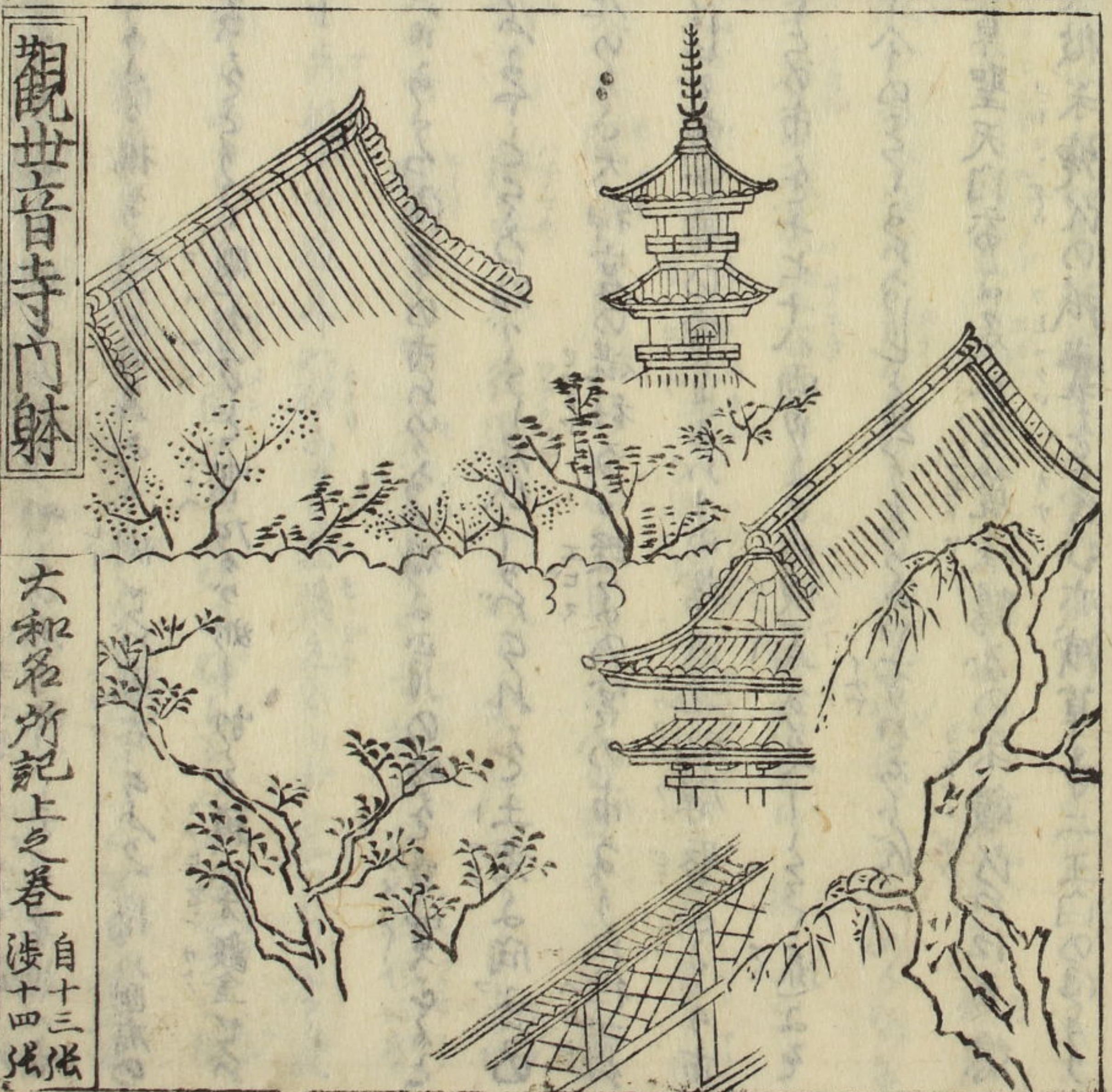
○今並木町と唱へるところは、奥羽街道より、松並樹あり。とあり。
名送りとのみ、鏡のりくは、彼れを栽られし、比より並樹と唱へ
たり。花川戸も、ゆり、船川戸といふ。彼れ並樹の樓は、因て花川戸と唱へ
たり。前より竹町の渡の古名を、花方の渡と唱へたり。彼れを
賞美するところあり。亦御前と唱へたり。様、本森橋荷と号する
禿倉あり。それゆゑ並樹の楼を栽られしは、勧請せり。や、花のべし。件の楼は
當初世人の賞翫たり。とあり。とあり。集合して、長光の暮るるを
とりて、とりて、とりて、寛永中の印本、東めぐりとの冊子、浅草並
樹の樓のりくは、えたり。

或云、子が鏡のりくは、駒貫堂の古名、駒貫堂あり。其方へ、ある渡と唱へ
たり。をとりて、花方の渡と唱へたり。彼堂の名は、負し、竹町の渡を、
初花方の渡と唱へたり。並樹の楼あり。とあり。のりくは、とりて、
推量

●かきぬはゆは代
 のまこととまゆは
 せとくさんくそ
 かごやうかりきれ
 人の心もすまわ
 りりそはれあ
 るとてあゆま
 らるるあやに
 ましませハニ世
 らるるのりそ
 あゆまるとま
 らるるあやに
 らるるあやに
 あさくさ川の流せ



よりおのりゆは
 りあげあはさん
 のひりりそ
 らるるあやに
 けあはあめ
 そはれあ
 之は権現と
 あがめなる
 焼り池は寺
 あり大玉門
 ごとくはち
 本堂なる
 針はるる
 枝あり
 いそはく



観世音寺門跡

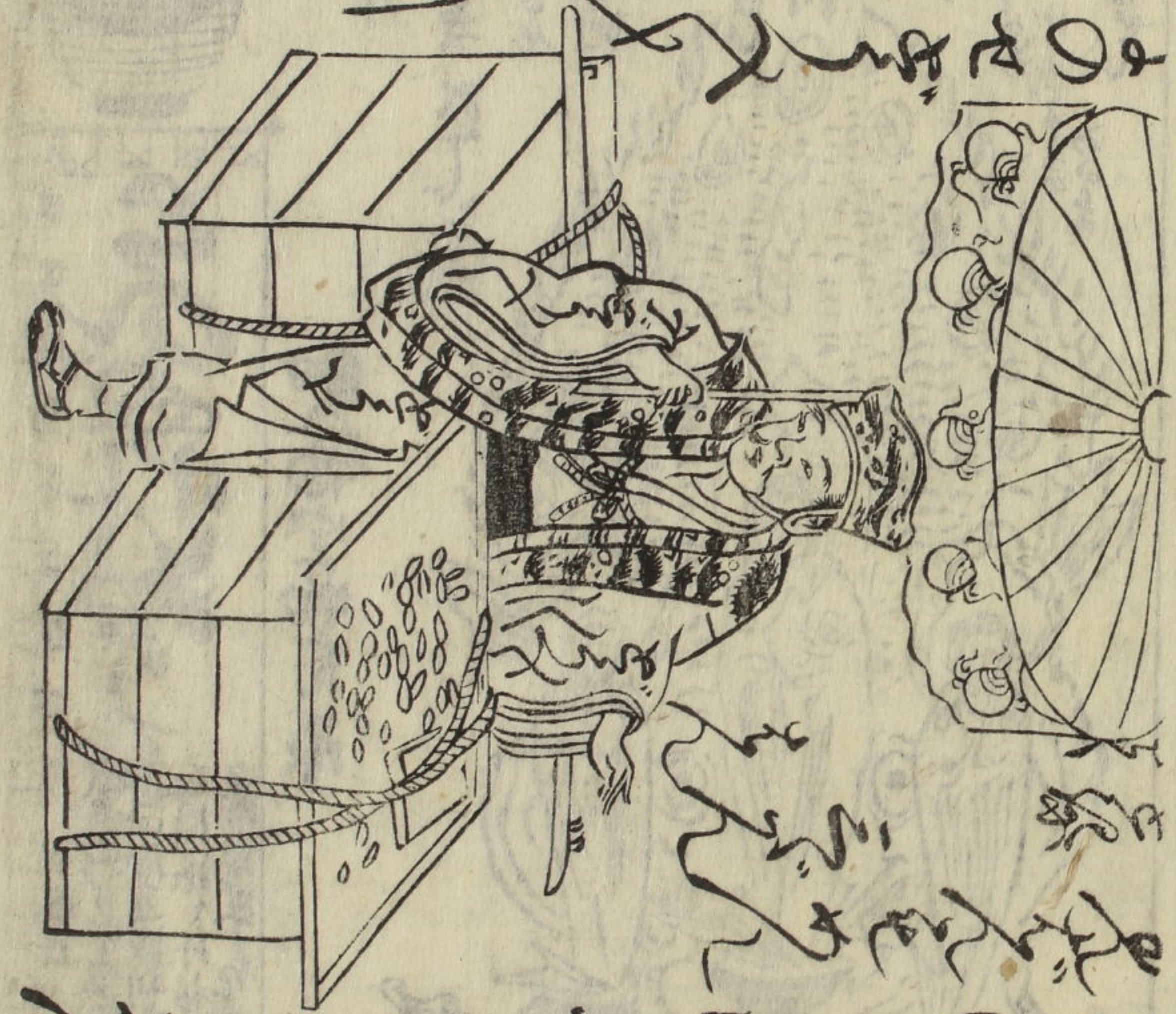
大和名所記上之巻
 自十三張
 十四張

以右為上

わんざびんころものを 翻刻してせり 倭人と人
あることよりわんざびんころものを 倭人と人
わんざびんころものを 倭人と人
雞助とて所謂燕石なるものなり

わんざびんころものを 翻刻してせり 倭人と人
あることよりわんざびんころものを 倭人と人
わんざびんころものを 倭人と人
雞助とて所謂燕石なるものなり

わんざびんころものを 翻刻してせり 倭人と人
あることよりわんざびんころものを 倭人と人
わんざびんころものを 倭人と人
雞助とて所謂燕石なるものなり





浮繪東都中洲夕涼之景

北尾政美画板元通油町

鶴屋喜右衛門
葛屋重三郎

おタイ
お七が菩提寺ハ小石川の南縁山圓乗寺ありは菩提寺ありとの記傳を
受くわら親をみる人さそを予とあふを白難老の岡よさるすのひの及
むと答たりの

周の服部子遷當唐山の飯類山を飯田町はあてり特傳のふあり
を一雅文とも地名を私改んるを實に稱ば重蒙ころるゆは李白の詩
飯類山前逢杜甫云云の七絶あり人のあふ所されば哉

○牛込駒込長祿長守の休もよもえたり往古牧の述るべし信濃あるも
新の牧の述るり目黒月白赤の往昔牧の駒を出せその名色よりして名
とんと但末由既よりのとろと月黒の驥馬黒目白の驥馬
ハ假字にて喜式に載らる不武藏國勅旨の牧五所の牧亦兼平官符よ
八月十三日の我父の牧北八日の同小所の牧の御馬貢之と見えたりとの外より
私に難なる牧數ありん煉馬の牧の馬を騎たりなる所を成草子

馬道の昔土馬と唱へ北里の標客馬よりあひりる名とりの
とりの牛込駒込とあつて牛の淵ハ車牛の墮られば名とりのとりの
まや今も九段坂の車をひくを禁ぢらる本所大町邊なる駒留石もその縁
故傳のとりあひり考正して追書とせらるるん

○落穂集とのりの富澤所ハ元禄年間富澤とのりの用發とりの
富澤所と唱へり後富澤と書更るるをその縁傳ありて寛永
中の地名をるる今富澤所とのりハ尾張所とありその次徐直所今ハ長
谷川所と唱へりハ落穂集の標をみる一亦通油所と塩所の間ハある
翠嶺も寛永の地圖より今通油所ハ南の隅より極留くとのり
まの今の大傳所ハ町田の通油所ハ又今の通油所ハ塩町よりありま
廣澤丁西の回祿後ハ邊なる寺院を他処へ遷され一時所割もあつたま
ま今このとりのよはれるるへ

○ゆりけは 御代の長久ある隨は物とて今大江戸子具是とてさるるは

あられも昔ありて今ありの神内初進能 明神の社此は 護経座 塚岡

八重夫 ハカカリ 弟を長官といふ神田辨所 耳垢取 二所同じとされりといはる穂鹿といふ出づ 獣の藝 鱈師 水もあつて母は湯鳥天祥 故

衣あたる女子野呂間人形つうい其名盤入形けいひ山猫ありいあつといふあめと

たてて坊主太平記 街改いさすてを平 記をいさすてをいさす 唄比丘尼 ウタヒクニ 萬籥人形賣扇の

地紙賣 奉書見 袋賣 紙もく足袋をつく 此れら入るるさつさつさつさつ

坊主どらひいさる唄比丘尼と扇賣の二三十年以前ありありて千歳お後

の小比丘尼と中男死改中を起り腰を高く引けり腰は柄杓を挿たるが

三四人を一隊とて老尼の半領とられ人々のいさすといと新 タニ

唄は物をととてさるればあんなうとていひて催役たり昔の形をとりて唄ひ

うい今よ比丘尼の各の送らうとて地獄変相の図を説きし思婦を

泣き 熊野比丘尼の流るるべし伊勢比丘尼のいふ自笑く愛敬昔男と

冊子あつてその越を盡すり扇賣の地紙の形とて箱をうとてねて有 カタ

うい毎夏は巷路を唱びあつた買んとり人あればその好まは任し即坐は是 コレ

を折す出れば今二十以下の人のあつたさもあつたさるべりれ年のをり タマ

あつた建武の比既子絶たるが東のうさあつたあつと兼好が徒然草あつた サ

い今い東あつても俗あつたさるあつたさるいともあつたさるいぬ京の熱想又責伊勢の ケサウ

樹へ泉列塚あつた九月の雛祭も僅よその名を存するの近属は戸もて猫 ネコ

の画あつたと唱びあつた生活とあつたあつたのありしがあつたが程あつた跡あつ アト

あつた又猫の蚤とてとんと唱びあつた妻あつたを娘一りのあつたあつたあつた ヤシ

あつた遠くあつたあつた猫の蚤をいさすあつたあつたあつたあつたあつたあつた ネコ

あつたあつたあつたあつた毛をいさすあつたあつたあつたあつたあつたあつた オホ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた オホ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた オホ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた オホ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた オホ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた オホ

冷本と稱するものありて冷本と藤原氏と二流ありて冷本の流ありては
大鏡巻之七十一張の内大臣藤原足大藤原原姓賜すありての
の十月の十六日よりありぬらう五十六大臣の位より廿八年の姓の
の事を記す紀の氏人のひる藤原の事をぬらありぬらありの事
氏よりある事ととの事いふ事とありたり亦是
ひりより紀をありたりといふも亦冷本と稱する人藤原の流ありて
家の紋ととも藤原を象するも藤原の流ありては浪合の記に冷本
重政 藤原の流ありては浪合の記に冷本 藤原の流ありては浪合の記に冷本
冷本三郎玄徳改長二列矢矧は位三列の冷本是るを紀姓の冷本あり
必藤原氏に紋藤原の丸といふを考へべし

○附くつみ前よりええたる石泉法印のまのの歌を予の知る年ありの
よひにしが誤ありたり予が毎歳著ん所の草紙物語のまのの歌に
際し稿に記するをよみていひを運んて追ふるに誤ありたり
されどその類の草紙ともいへるをよみていひを運んて追ふるに誤ありたり
それゆゑ又熱念に記する

○園より長間をえ乃と刻す和名鈔云并名苑注云長間筆
筆青最晩生味大苦といふ是今の真竹子歟之乃女細竹芽な
るなりやれは今の俗の長竿より長ゆえ乃之竹は長篠ありとの
長ゆえ乃より篠を重く唱へたりん倒せば下總あり真間の縫揚陸
負あり狭のまを布あり又布よりありてを布といふ同の如く真間の縫は狭の
陋と同じ狭をこれらるまを重く刻を異なりての事あり
類ありたりなり

① 字體 俗字解 附

風ハ凡よんひ百よんあが古よん虫よんふら後ありては漢の時既に

虫は从ひく風と書ゆのハ稀なりなりヤ王元論衡卷之十六云夫虫風氣
所生蒼頡知之放凡蟲為風之字取氣於風故蟲ハ
田而化生云云この説の如くハ虫ハ風より生ずるの虫ハ
八月より化生せり然レハ風の凡ハ从ひ虫ハ从ひ虫ハ从ひ虫ハ
古字ありといはんハ風を風の古字とせるといハ虫の説も穿鑿附會と
せん歟らるゆなり

○蒼頡字を考るとんば一字を考るとんば其の類を考るとんば水字も
成レ後雨字を考るとんば又雨字も考るとんば雲字考るとんば故の如く
从ひ門は从ひ水も从ひ一ハ於逸切教之始也又物之極也亦強難切音字
なり門ハ蟹切林外曰門象遠界と字書に云んたり雨ハ水氣の如く
故ハ雨ハ水ハ从ひ水ハ从ひ水ハ从ひ水ハ从ひ水ハ从ひ水ハ从ひ水ハ
然レハ从ひ水ハ从ひ水ハ从ひ水ハ从ひ水ハ从ひ水ハ从ひ水ハ从ひ水ハ

らハ雨字も成レ後雨字も考るとんば雲字考るとんば故の如く
雲聚るが如く古人往々理を推義を演ずるハ字體を説く予らんを
一ハ字體の理を考るとんば説く予らんを一ハ字體の理を考るとんば
とんばとんばの蒼頡何んぞとんば字を作るとんば理の解とんばとんば
○小説射と矮のその義をとんばとんばとんば射の身は从ひ寸は从ひ寸は
の義とんば矮の夫は从ひ委は从ひ委は从ひ委は从ひ委は从ひ委は
の理屈なり今試みん射るハ必その身を正しくハ聖人の言は曰射
有レ似乎君子失諸正鵠及求諸其身也然レハ射字の身ハ
从ひ寸は从ひ寸は从ひ寸は从ひ寸は从ひ寸は从ひ寸は从ひ寸は
矮を矮人の義とんば矮の夫は从ひ委は从ひ委は从ひ委は从ひ委は
委ハ鳥鬼切音葦云云本曰原末曰委説文委隨也从
从レ禾徐鉉曰委曲也取レ禾穀衆穗委曲貌といふ

字をとりて傍刻を施すなりと云ふれば雅俗ともよまれを疑はば
音の漢字をとりてそのりのみあれど中集より音訓を採りて留りあるれ
漢混雜の文ありしが俗より解し易らざれば文一変して和漢を
合するものありと云ふなり

○近衛醫師の云く本草は瘡のありたり患者禁好物を録し
人を遣はされを同くそのうちハ鯨あり竹豚の和訓をフクといふ
俗人音を借りて鯨は化る醫師これをあつと結してアビと云ふこれを
行せり患者能びてヤクク竹豚を食ふ行ふその夜果て死せりといふ
俗人の鯨の竹豚あるをあつと鯨の石決明あるをあつと鯨のハク
石決明あるをあつと俗の竹豚あるを悟らんと鯨の意に鯨のハクあり
雅俗あるをあつと人殺さば竹をもち醫術と稱らるる世間ある
類々と云ふなり

本草綱目介之二云。石決明釋名九孔螺。華嚴
名千里光。時珍曰。決明千里光以功名也。九孔螺
以形名也。集解弘景曰。俗云是紫貝。人皆水漬。蟹
腹。頗明。又云。是鯨魚甲附石生。大者如手。明燿五
色。内亦含珠。恭曰。此是鯨魚甲也。附石生。形如蛤
惟一片無對。七孔者良。今俗用紫貝。空非云云。和
名鮑云。鯨四聲字苑云。鯨。鮑音抱。和名鮑。似蛤。偏
著。石本草云。鮑一名鯨。鮑音抱。和名鮑。似蛤。偏
明。和名亦五雜俎云。鯨音撲。今人誤為鮑。非也。龍
譜云。一名石決明。一殼如釜。黏石上。圍中有一。但
差小耳。又乃彙集。延喜式。亦云。鯨。和名鮑。似蛤。偏
説。不具。竹豚魚。當りの。其の孰最甚。

○今の生薬舖皂角刺を讀み皂角刺と云へれ皂角子と同音ある故に

○林巻説苑は灸一灼を一壯と云ふ壯年の人よめく歳灼と定めたるに

あり正字通は熨葛註音壯火貌熨熟也。今炊粉資韻之

○壯を象するは灸一灼を云ふ壯は俗因作熨

○親の首文あり昔の喜の首文あり仁他の首文あり見ハ見の首文あり

○我俗燈花の子を結ぶりのをりて子類と接ぶるは丁も又燈をあり

○唐山の俗有欲録は丁をりて遺忘は海

○新令は男女十八歳以上を丁以後課役云云といふは

○我俗燈花を祝はるは丁をりて吉丁子とのは是則唐山の俗

○廬江王夫人嘗燈花石一篇を著りその略も云右乾鵲噪而

混ぶらん

林巻説苑

沈存中

あり

熨

壯

灸

灼

壯

親

我

唐

新

我

報

廬

廬

廬

俗子の用心

壯年の人

熨熟也

壯火貌

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

壯は俗

